

---



---

 学 会 記 事
 

---



---

## 第41回新潟造血器腫瘍研究会

日 時 平成11年10月22日(金)  
18:15~  
会 場 新潟大学医学部  
有壬記念館 2階

## 一 般 演 題

## 1) MDS に対するビタミン D3 と K2 併用療法

真田 雅好・細葉美穂子(新潟市民病院)  
新沼亜希子・高井 和江(内科)

【はじめに】中高年者の MDS に対して活性型ビタミン D3 と K2 併用療法を試みた。

【対象と方法】対象は MDS 9 例で RA 5 例, RAEB 2 例, RAEB-T 2 例。男 4 例, 女 5 例。年齢は 47~84 才(平均 68.7 才)。染色体分析では RA 2 例, RAEB 2 例, RAEB-T 2 例に異常がみられた。D3 0.5 μg, K2 45 mg/日を 6 ヶ月以上経口投与した。必要時, 適宜輸血を行った。

【結果】輸血のない 5 例(RA 4 例, RAEB 1 例)では 1 例(RA)に 3 ヶ月後に 3g 以上の血色素の増加をみた。他の 4 例は 3 ヶ月, 6 ヶ月後とも 1g 以内の変動であった。

輸血のある 4 例(RA 1 例, RAEB 1 例, RAEB-T 2 例)では 1 例(RA)に年間 16-18 単位の輸血量が 3 ヶ月で 2 単位, 6 ヶ月で不要となった。1 例(RAEB)は 3 ヶ月で RAEB-T に, 6 ヶ月で AML に移行し, 輸血量も増加した。2 例の RAEB-T のうち 1 例は 2 ヶ月で AML に移行し死亡, 1 例は 3 ヶ月, 6 ヶ月とも輸血量が増加した。

すなわち有効は 2 例でいずれも RA, 不変はいずれも輸血のない 4 例で RA 3 例, RAEB 1 例, 悪化はいずれも輸血のある 3 例で RAEB-T 1 例, AML に移行した 2 例であった。副作用はなかった。

【考案】わずかに 9 例で, しかも投与期間も 6 ヶ月と短い, 有効な治療法が確立されていない MDS では, 本法は試みる価値があると思われた。

## 2) 自己末梢血幹細胞移植併用大量化学療法後に二次性 MDS (RAEB in T) を発症した NHL の一例

廣瀬 貴之・今井 洋介(県立がんセンター)  
石黒 卓朗・張 高明(新潟病院内科)

【症例】54 才, 男性。94 年 5 月に NHL (follicular, medium, B, CSIVA) を発症。ProMACE-CytaBOM, CHOP にて CR。95 年 9 月に 1 回目の再発をしたが, CHOP 2 コースで再び CR となったことから chemosensitive relapse と考え, 大量化学療法の適応と判断。同年 11 月に VP-16 大量療法にて PBSCH を行い, 96 年 7 月自家末梢血幹細胞移植併用大量化学療法(MCVC)を実施した。約 2 年後の 98 年 5 月に 2 回目の再発をきたしたため, 外来で VP-16+PSL, MST-16 内服治療を実施中, 99 年 3 月から汎血球減少が出現し進行。

99 年 4 月の骨髄: NCC: 41.5 × 10<sup>4</sup>, M<sub>gk</sub>: 172, M/E: 7.97, Myeloblast: 7.2% (Auer 小体+), dysplasia (+), リンパ腫浸潤 (+)。染色体: 46, XY, del(9)(q22; q32) 13/20. 11q23 (MLL) gene 再構成なし。以上から二次性 MDS (RAEB in T) と診断した。

【考察】近年, 自己造血細胞移植後の二次性 MDS や AML の発生頻度が予想以上に高いことが報告されている。その発症機構として, 大量化学療法以前に行われた治療が自己造血幹細胞になんらかの傷害を与えていることなどが予想されているが, 詳細な機序は未だ解明されていない。自己造血細胞移植症例が増加するなか, 二次性 MDS/AML はその晩期合併症として予後不良な病態であり, 患者の予後や適応等を十分考慮した上での治療法の選択が必要と考えられる。

## 3) 過去 10 年間, 当院における MDS の臨床

八木沢久美子・服部 晃(佐渡総合病院 内科)

過去 10 年間に当院では, 123 例の MDS 症例を経験したので, その統計や臨床的特徴につき報告する。MDS 123 例の内訳は, RA 97 例, RARS 8 例, RAEB 13 例, RAEBinT 3 例, CMMoL 2 例と RA が 78.8% を占めていた。患者の年齢性別分布であるが, 佐渡地区は, 高齢者の多い地区で, 70 才代が最も患者数が多かった。また男女比は, 女性に多く, 全国平均と異なった。発症時の血球減少であるが 95% に認められ, この内 2-3 系統の減少が高率であった。赤血球系の減少(貧血)が